

本居宣長の源氏物語研究 —「もののあはれ」論を中心として—

工藤 進思郎

1.

本居宣長は、享和十五年（一七三〇）五月七日、伊勢国飯高郡松坂本町（現三重県松阪市）の木綿問屋小津三四右衛門定利の子として生まれた。母は同じ松坂の商人村田孫兵衛豊商の娘で、名をお勝^{かつ}と^だいた。元文五年（一七四〇）十一歳（数え年、以下同）の時に父が江戸店^だで病没し、養嗣子の小津宗五郎が家督を継いだ。翌寛保元年（一七四一）五月、宣長は母・弟妹らとともに魚町の別宅（隠居家）に引き移った。以後、今井田家に在った二年余を除けば、ここが宣長生涯の住居となる。

近世国学の大成者とされる本居宣長（一七三〇～一八〇一）が、もっとも愛読した古典の一つとして『源氏物語』をあげることに異論はないであろう。それにしても、彼が『源氏物語』への関心を持ち始めたのは、いつ頃のことだったのか。筑摩書房版『本居宣長全集』第十六卷所収の『萬覺』によれば、宣長は八歳から手習を始め、「いろは」「加名文^{かな}」「教訓之書」「商売往来」「千文字」等を学んでいるが、寛保元年（一七四一）、十二歳になると『小学』序・『大学』『中庸』『小学』『論語』『孟子』等の漢籍とともに、謡曲を学び始め、十五歳の延享元年（一七四四）までに習ったものとして、「猩々」「江口」「羽衣」「源氏供養」「野宮」「井筒」など、あわせて四十九の曲名が記してある。

さて、後年の執筆にかかる『玉勝間』二の巻「おのが物まなびの有しやう」の条において、宣長は次のように述べている。

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひて、よみける。さるははかばかしく師につきてわざと学問すともならず、何と心ざすこともなく、そ

のすぢと定めたるかたもなく、たゞからのやまとの、くさぐさのふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよみけるほどに、（全集一）¹

幼少の頃から「書をよむこと」を何よりも好んで、和漢にわたる種々さまざまな書物をほとんど手当たり次第に読んだというのであるが、彼はいつしか関心のある事項をせっせと書き留めるようになり、多くの読書ノートや写本を作っている。前掲の『玉勝間』二の巻の同条には、次いで十七、八歳になると和歌に心を寄せるようになって、独りひそかに歌作を始めたものの、「人に見すること」はしなかったと記している。歌学ノート『和歌の浦』（全集十四）や『歌の抜書』（全集未収）などを書き始めたのも、この頃のことではなかったかと思われる。宣長の歌稿十九冊を年代順に収録した『いそのかみかう石上稿』の第一冊『ながさだ榮貞詠草』の「寛延元年戊辰詠和歌」の巻頭に、

此道にこゝろざしてはじめて立春心を読侍りける
新玉の春きにけりな今朝よりも霞ぞそむる久方の空
（全集十五）

と見える一首は、寛延元年（一七四八）春の作で、いわば宣長にとって歌らしい歌の第一作だった言えよう。この年十一月、宣長は伊勢国宇治山田（現三重県伊勢市）の紙商今井田尹平の養子となって同家に移ったが、歌学びへの関心はいよいよ深まり、『今井田日記』（全集十六）寛延二年（一七四九）の最後の条には、

△去辰ノ年ヨリ、和歌道ニ志
△今年巳ノ年ヨリ、専ラ和歌ニ心ヲヨス

と記してある。本格的に和歌の道を志して歌作にのめり込んで行く、昂揚した宣長の心意気を感じられる記事である。この年三月からは、同所宗安寺の法幢和尚に和歌の添削を受けるようになった。その添

¹筑摩書房版『本居宣長全集』第一巻所収、の意。以下、同じ。なお宣長の著作・資料の引用も、特に断ったもののほかは、すべて同全集によった。

削詠草は六回分七十九首が残っており、『榮貞詠草』寛延二、三年の条に七十首が載録されている²。

一方、青少年期における宣長の熱心かつ意欲的な学習状況を示す読書ノート類を見ると、早くも『湖月抄』の「發端」から「夕顔」に至る巻々よりの抜書十五ヶ条（『都考抜書』四、全集別巻一）や、『源氏物語』各巻の主題歌とおぼしきものを記したメモ（『歌のぬき書』第三冊、全集別巻二）などもあり、『源氏物語』に寄せる若き日の宣長の興味と関心のほどがうかがわれるのである。『都考抜書』六冊（全集別巻一）は十七歳から二十二歳にかけて、歴代の京都、特に平安京に関わる諸事項を古今の書から抜書したものであるが、わけてもその第三冊は、『古今集』『伊勢物語』『宇治拾遺物語』『平家物語』『徒然草』等々からの抄出のほか、和歌にちなむ京の数々の名所を書きつらねた「倭譚名所」など、古典文学とその舞台平安京に寄せる宣長の愛着と憧憬をうかがわせるものとして注目される³。

また、表紙に「今華風」⁴と署名された『源氏物語覺書』一冊（全集四）も、その頃に成ったものと見られており、『源氏物語』中の言葉の俗語訳や、登場人物の年齢に関する注記などが書かれている。そのうち「源語譯解」の項には「桐壺」から「末摘花」まで六巻に関わる語彙しか扱われていないが、「難譯」の項を見ると、語数こそ少ないものの、「桐壺」から「橋姫」に及ぶ語彙を拾ってある。これは二十歳頃の宣長が『源氏物語』全巻を読破するととも、単なる読書ノートの域を脱して、すでに研究的態度をもってこの物語に臨んでいたことを示唆するものと言ってよい。

² 本居宣長記念館編『本居宣長記念館名品図録』（一九九一年）参照。

³ 岩田隆『本居宣長の生涯』（一九九九年、以文社）参照。

⁴ 今井田華風の意。『今井田日記』（全集十六）寛延二年（一七四九）九月の条に、「廿二日、華風ト改ム、モトハ華丹」とあり、二十三歳頃まで雅号として用いた。

さて寛延三年（一七五〇）十二月、宣長は「ねがふ心にかなはぬ事有しによりて」（『家のむかし物語』、全集二十）、今井田氏を離縁して松坂の実家に戻った。「ねがふ心」の内実は明らかでないけれども、商売に明け暮れる養家の生活への違和感を深める中で、ますます歌文の学への執着をつのらせていったもののようで、それはかつて小林秀雄が言ったように「学問をねがふ心」とする見解⁵に与したいと思う。翌年二月、宣長は義兄宗五郎の死去に伴い、小津家の家督相続人となるが、周知のように二十三歳を迎えた宝暦二年（一七五二）三月には、医学修業のため単身上京することになった。その間の事情について、『家のむかし物語』には次のように書かれている。

此ぬし（父定利）なくなり給ひては、恵勝大師（母お勝）みづから家の事をはからひ給ふに、跡つぐ弥四郎（宣長）、あきなひのすぢにうとくて、たゞ書をよむことをのみこのめば、今より後、商人となるとも、事ゆかじ、家の資も、隠居家の店おとろへぬれば、ゆくさきうしろめたし。もしかの店、事あらんには、われら何を以てか世をわたらん、かねてその心づかひせではあるべからず、然れば弥四郎は、京にのぼりて学問をし、くすしにならむこそよからめ、とぞおぼしおきて給へりける。（全集二十）

父亡き後、宣長ら四人の子供を育てあげて来た苦労人の母が、学問好きだが商才に欠けた息子の気質と、傾いてきた我が家の先行きを考え、宣長に医師への転身を勧めたというのである。

『寶暦二年以後購求謄寫書籍』（全集二十）によれば、それから五年半余に及んだ京都遊学中、宣長が書写ないし入手した書籍は夥しい数に上がる。そのうち、『源氏物語』関係のものとしては、『帚木抄』『弘安源氏論義』『紫家七論』各一冊を書写するとともに、『源氏装束抄』三冊や『湖月抄』六〇卷二五冊を購入している。こ

⁵小林秀雄『本居宣長』（一九七七年、新潮社）「三」。

れは医学の傍ら、『源氏物語』をはじめとする古典文学の研究にも傾倒していたことをうかがわせるものであるが、それにもまして重要なのは、儒学の師であった堀景山（一六八八～一七五七）を通して、荻生徂徠（一六六六～一七二八）ら古文辞学派の文学観に親しむ一方、これまた景山を仲介として『百人一首改観抄』をはじめとする契沖（一六四〇～一七〇一）の多くの著作に接し、古典の文献学的研究に開眼するに至ったことである⁶。

在京中にその骨子はすでに成っていたとも言われる『^{あしわけこぶね}排蘆小船』（一冊、全集二）において、和歌の本意を説くにあたって、「歌ノ道ハ善悪ノギロンヲステ、モノ、アハレト云コトヲシルベシ」、「スベテ此道ハ風雅ヲムネトシテ、物ノアハレヲ感ズル處ガ第一ナルニ、ソレヲバワキマヘナシテ、タゞモノヒタブルニ流儀ダテヲ云ヒ、……」のように、「モノ、アハレ」という語句を用いた例が見受けられるとともに、「歌ノ本體、政治をタスクルタメニモアラズ、身ヲオサムル爲ニモアラズ、タゞ心ニ思フ事ヲイフヨリ外ナシ」とも述べているのは、和歌を政教主義から解放し、もっぱら人情のありのままを表出したものとする斬新な主張として注目される。もっともこれらが契沖学の根底をなす主情的な人間観や、徂徠・景山らの詩歌論における人情説の影響下に成った言説であることは否定しがたいとしても⁷、ここにはすでに後の「もののあはれ」論への方向が判然と指し示されていることを見落としてはならないであろう。

⁶ 堀景山は朱子学派の儒官であったが、荻生徂徠と親しく古文辞学派の主張から深い影響を受けるとともに、国典にも通じて契沖の著書を多く蔵していた。京都遊学期における宣長の契沖学受容が、主にこれら景山所蔵本によって行われた次第は、岩田隆「宣長における文学論の生成序説—その形成過程について—」（『宣長学論攷』所収、一九八八年、桜楓社）に詳しい。

⁷ 京都遊学中の宝暦五年（一七五五）から同七年（一七五七）頃までの読書ノートと目される『本居宣長随筆』第二卷（全集十三）には、『徂徠先生問答録』や堀景山『不尽言』からの抄録がしばしば見受けられる。

宝暦七年（一七五七）十月、二十八歳の宣長は、京都遊学を終えて松坂に帰り、小児科医を開業する。しかし、歌文への学問的関心はますます深まり、翌八年五月三日には『安波禮辨・紫文譯解』（全集四）の稿を起こしている。わずか墨付六丁の小冊子にすぎないが、前半の「安波禮辨」において、「あはれ」の用例を『記紀』以下の諸書から集めて考察し、和歌・物語の「本意」は「アハレノ一言」に尽きると述べるとともに、

スベテ和歌ハ、物ノアハレヲ知ルヨリ出ル事也。伊勢源氏等ノ物語ミナ、物ノアハレヲ書ノセテ、人ニ物ノアハレヲ知ラシムルモノト知ルベシ。是ヨリ外ニ義ナシ。

のように、「物ノアハレ」という言葉（概念）をもって和歌・物語の本意を説明しようとしているのは注目に値する。『紫文要領』及び『石上私淑言』^{いそのかみささめごと}の両著に至って完成される「もののあはれ」論は、ここにおいてすでにその基礎は固まっていたと見てよいだろう。

宣長手沢本『湖月抄』（本居宣長記念館蔵）「夢浮橋」巻尾の貼紙及び『日録』『日記』（全集十六）によれば、浅原義方ら九人の懇請に応え、鈴屋において『源氏物語』の定期講釈を始めたのは、二十九歳の宝暦八年（一七五八）夏のことで、それはちょうど『安波禮辨・紫文譯解』を起稿した時期にあたる。以後、全五十四帖の講釈を終業すること三回、引き続き開かれた第四次の講釈も、六十六歳の寛政七年（一七九五）四月には、第三十三帖「藤裏葉」までを終えていることが確認できる。式日（開講日）を二・六・九の日（明和二年以後は二・六・十の日）として、一ヶ月に九回のペースで開講し、都合三十七年以上の長期にわたり精力的に続けられた。

第一次 宝暦八年（一七五八）夏開講、明和三年（一七六六）六月三十日終業。

第二次 明和三年（一七六六）七月二十六日開講、安永三年（一七七四）十月十日終業。

第三次 安永四年（一七七五）一月二十六日開講、天明八年（一七八八）五月十日終業。

第四次 天明八年（一七八八）六月二日開講、寛政七年

（一七九五）四月二十九日「藤裏葉」終業

（以後、日記に鈴屋での源氏講釈の記事は見えない）。

なお、このほかに寛政六年（一七九四）冬・同十一年（一七九九）春・同十二年（一八〇〇）冬から翌年の春に至る紀州若山での三回にわたる出張講釈、及び享和元年（一八〇一）夏の京都における出張講釈においても、宣長はいつも『源氏物語』を取り上げており、また寛政七年（一七九五）八月には、伊勢参宮の途次、松坂の旅館美濃屋に宿泊した石見国浜田藩主松平康定に招かれて「初音」の巻を進講したこともある。

『源氏物語』に対する宣長の読みは、これら長年に及ぶ講釈の進行とともに確実に深まり、前述の『安波禮辨・紫文譯解』や、「物のあはれ」の語例を含む『源氏物語』の要語・事項索引稿と見なし得る『詠歌疑条』一冊（全集十四）をはじめ、『紫文要領』二冊（宝暦十三年〈一七六三〉、全集四・別巻一）・『源氏物語年紀考』一冊（宝暦年間、全集四・別巻一）などの論考、『源氏物語和歌抄出』（宝暦十四年〈一七六四〉）・『源氏四季風景詞』（宝暦年間）・『源氏物語諸抄發端』（同）各一冊のごとき抄出本（以上三冊、全集未収）、さらには光源氏と六条御息所の馴れ初めを描いた擬作『手枕』一冊（宝暦年間、全集十五・別巻一）も成り、また備中宮内（現岡山市）の門人藤井高尚との間で取り交わした『源注答問』（現存三冊、寛政年間、全集十八・別巻一）には、『源氏物語玉の小櫛』五の巻以下の注釈を補うべき考説も散見する。その間、手沢本『湖月抄』の全巻にわたって、本文の校合や諸注釈からの書入のほか、本文の解釈に関わる宣長自身の考説が多数加えられた⁸。

このように長年にわたる宣長の『源氏物語』研究の総まとめとして、寛政十一年（一七九九）に至って世に出たのが、『源氏物語玉

⁸ 杉田昌彦「宣長手沢本『湖月抄』書入について」（『国語と国文学』第七十卷第九号、一九九三年九月）参照。

の小櫛』九卷九冊（全集四）であった。

2.

宝暦十三年（一七六三）六月に成った『紫文要領』二冊⁹は、題名の示すように「紫文」すなわち『源氏物語』の大旨を述べたもので、「作者の事」「述作由来の事」「述作時代の事」「作者系譜の事」「紫式部と称する事」「准拠の事」「題号の事」「雑々の事」「注釈の事」「大意の事上」（以上、巻上）と、「大意の事下」「歌人この物語を見る心ばへの事」（以上、巻下）のあわせて十二項目にわたって論じられているが、全体のほぼ四分之三を占める「大意の事」上・下の部分に、本書述作の眼目があったのは言うまでもない。

「作者の事」から「注釈の事」に至る九項目では、それぞれ旧注の説をあげて論評を加えている。その所説をここにいちいち紹介することは省略するが、宣長の説くところはいずれも概ね正鵠を射ており、現今の源氏学においてもそのまま通用する卓見が少なくない。たとえば旧注が重視した准拠について、「ただ作者の心中にあることにて、後にそれをことごとく考へ当つるにも及ばぬことなれども、古来沙汰あることゆゑ、その趣きをあらあらいふなり」（二六頁）と述べ、「緊要のことにはあらず」と断じているのは、虚構を通して真実を描くところに文学の本質を見ていた宣長の立場を明示するものと言わねばならない。

次に、「大意の事」上・下は、『源氏物語』の本意が「物の哀れを知らしめること」に存することを論証した、所謂「もののあはれ」論である。すでに『排蘆小船』においてその骨子の成立を見ていた文学観を、「もののあはれ」の理念によって体系化したもので、『源氏物語』研究史上はもとより、日本の文学論史においても画期的な

⁹ 以下、『紫文要領』の引用は、成稿後の抹消・書入の多い自筆稿本（本居宣長記念館蔵、全集四）を避け、日野龍夫校注『本居宣長集』（新潮日本古典集成）所収のもの（東京大学本居文庫蔵写本）に依った。

学説であることは改めて言うまでもないだろう。宣長はまずその冒頭において、異国の儒仏百家の書の趣をもって、わが国の物語を論じてきた旧注の非を指摘した上で、次のように述べている。

さてその物語といふものは、いかなることを書いて、何のために見るものぞといふに、世にありとあるよきこと・^あ悪しきこと、珍しきこと・面白きこと、をかしきこと・あはれなることのさまざまを、しどけなく女文字に書いて、その絵を書きまじへなどして、つれづれの慰めに読み、または心のむすぼほれて物思はしき時のまぎらはしなどにするものなり。その中に歌の多きことは、国の風にして、心をのぶるものなれば、歌によりてその事の心も深く聞え、いまひときは哀れと見ゆるものなればなり。さていづれの物語にも、男女の中らひのこののみ多きは、集どもに恋の歌の多きに同じことにて、人の情の深くかかること、恋にまさることなきゆゑなり。（四〇～四一頁）

これは、『玉の小櫛』巻頭の「すべての物語書の事」の条に相当するもので、①物語は世態人情の種々相を仮名文字で綴り（絵を添える場合もある）、②退屈な時や物思いがちな時に読んで心を慰めるものである。また③多くの作中歌はそこに書かれている事柄の情趣を深く理解するのに有効であるとともに、④物語が好んで男女の間柄を描くのも、歌集に恋歌が多いのと同じで、人情の切なること恋にまさるものはないからだ、とした。

以下、『源氏物語』の中から、「古き物語どもの趣き」や、それを読む時の登場人物たちの「心ばへ」が描かれている多くの箇所を取り上げて検討を加えていくが、その過程で宣長が最もに注目したのは、「螢」の巻で玉鬘を相手にして語る光源氏の「物語論」であって、いちいちその本文を引きながら懇切な注解を施し、「式部がこの物語の本意を寓する下心」を、そこに読み取ろうとした¹⁰。

¹⁰ 以下、本稿では『源氏物語』の原文引用部分については、参考のため『谷崎潤一郎新々訳 源氏物語』（一九六五年、中央公論社）の訳文を付記した。

[a] 「あなむつかし。女こそ物うるさがりせず、人にあざむかれんと生れたるものなれ。ここらの中にまことはいと少なからんを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心を移し、はかられ給ひて、暑かはしきさみだれ髪の乱るるも知らで書き給ふよ」とて笑ひ給ふものから、（四八頁）

「まあ面倒な。女というものはうるさがりもしないで、人に欺されるように生れついているのですね。たくさんな絵物語の中でもほんとうの話はいたって少ないでしょうに、そうと知りつつこういう埒もないことを興がったり、真に受けたりなさって、蒸し暑い五月雨時に、髪の乱れるのも気がつかずに書いていらっしやるんですね」と、お笑いになるのですが、

たくさんの物語の中に「まこと」のことはほとんどないと知りながら、そんな「すずろごと」に騙されて夢中になっている玉鬘を源氏がからかっている場面である。宣長は「すこしたはぶれかかりて古物語をいひおと貶しめ給ふなり」（四九頁）と注して、紫式部が『源氏物語』のことを「論難」して見せたものと解している。その通りではあろうが、この「論難」の裏に、かくも人を惹きつけてやまぬ魔力が物語に存することへの自負をも読み取ることが出来るのではなかろうか。「笑ひ給ふものから」という逆説表現を受けて、光源氏は次のように語り継ぐ。

[b] また「かかる世の古言ふるごとならでは、げに何をかまぎるることなきつれづれを慰めまし。さてもこの偽りどもの中に、げにさもあらんと哀れを見せ、つきづきしう続けたる、はたはかなしごとと知りながらいたづらに心動き、らうたげなる姫君の物思へる、見るに片心つくかし。またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて、静かに聞くたびぞ憎けれど、ふとをかしき節あらはなるなどもあるべし。（五〇～五二頁）

でもまた、「こういう昔物語でも見るのでなければ、全くほかに

は紛らしようのないこのつれづれを、慰める術もありますまい

ね。それに作り話の中にも、なるほどさもあるという風に、あわれを見せて、もっともらしく書きつづけてあるのは、根もないことだと知りながらも、わけもなく心が動くもので、可愛らしい姫君などが憂いに沈んでいるのを見ると、ついその味方をしてしまいます。またこのような馬鹿らしいことがと思ひ思ひ読んで行くうちに、ものものしい書き方に眼を眩まされて、後で静かに考えると腹が立つようなことなのが、一寸見には飛び抜けて面白いというようなものもあるでしょう。

「論難」から一転して物語の持つ「魔力」へと話に移る。「この偽りどもの中に」以下について宣長は、全体は偽りであるけれども、その中に、なるほどさもあると思われて、作りごととは知りながら共感を覚え感動することがあるとして、

下心、「げにさもあらんと哀れを見せ」といふところが、『源氏物語』の緊要なり。物の哀れを知るといふは、ここのことなり。この哀れを知らさんための源氏物語なり。

と説き進める。『源氏物語』の本意は「物の哀れ」を知らしめるところにこそ存するのであって、「勸善懲悪のため、ことには好色の戒めに書くといふは、大きにひがことなり」（五二頁）と断じる。

□「その人の上とて、ありのままにいひ出ることこそなけれ、よきも悪しきも、世にふる人の有様の、見るにもあかず、聞くにもあまることを、後の世にもいひ伝へさせまほしき節々を、心にこめがたくていひおき始めたるなり。よきさまに言ふとては、よきことの限りを選び出で、人に従はむとては、また悪しきさまの珍しきことを取り集めたる、みな方々につけて、この世の外のことならずかし。（五八～六六頁）

「一体物語というものは、誰それのことと、きまった一人の上のことをありのままに写すのではありませんが、いいことでも悪いことでも、世間にある人の有様で、見るにも飽きず、聞いてもそのままにしておけない、後の世までも伝えさせたいことのふしぶしを、心一つに包んでおくことができないので、書き留めておい

たのが始まりなのですね。よいように言おうとする時はよいことの限りを選び出して書きますし、読者に^{おもね}阿ろうとする場合には、また珍しい悪いことなども取り集めて書きますけれども、皆それぞれにほんとうのことで、この世のほかのことというのではありません。

前掲 [b] の「さてこの偽りども中に、げにさもあらんとあはれを見せ」云々が、いわば読者の心構えを述べていたのに対して、ここは作者の側から物語創作の動機・方法について語ったものと言ってよい。この条に関する注解において、宣長はまず、物語は「そらごと」ではあるけれども、この世にまったく痕跡のないことを書いたものではない。誰それの人と明記して、ありのままに書くことはないものの、作者が見聞した善悪さまざまな事柄のうち、自分の胸一つに収め切れず、ぜひ後世までも伝え残しておきたいと思うことを、虚構に託して述べたものであって、「そらごとながらそらごとにあらず」（六一頁）というのが物語の「まこと」であるとした。すなわち物語は、事実そのものの再現・記述ではなく、作者の体験的事実に基づく感動を契機として仮構された真実の世界にほかならないというのである¹¹。

また、引用 [c] の文中に見える「よきも悪しきも」に関して、道義のないし勸善懲悪的な側面から捉える旧来の所説¹²を、「それは

¹¹ 菊田茂男「『源氏物語』螢の巻の物語論」（『文化』第三十巻第二号、一九六六年八月）参照。

¹² 「師 凡、作物語は其人の事とて名を顯してはかゝねども、世ノ人のありさまの善悪の、見てもきゝてもさしをかれぬ事の、後世に残して人の教にもしたき故、かきをきたる物ぞと也」（『湖月抄』螢「その人のうへとて」頭注、岡山大学附属図書館蔵松屋旧蔵本）、「是古記草子の事を論ずる様にて、やがて、式部が意趣と見ゆれば、物がたりをすべて作り事とのみいふべからず。みな其世にありし人のうへを述て、勸善懲悪をふくみたり」（『紫家七論』其五「作者本意」、日本思想大系『近世神道論・前期国学』所収）。

浅々しき見やうにて、紫式部の本意にあらず」（六一頁）と一蹴するとともに、「よきこと」「悪しきさまの珍しきこと」を誇張して描くのは、「読む人をして深く感ぜしめむため」（六六頁）の有効な技法であると述べているのは、いかにも宣長らしい主張と言わねばならない。

このように『源氏物語』は、決して勸善懲悪のためでも、好色の戒めのためでもなく、また仏教の方便でもなくて、「ただ人情のありのままを書き記して、見る人に人の情はかくのごときものぞといふことを知らするもの」（八四頁）であったこと、すなわち「物の哀れを知らしめる」ところにこそ、この物語の本意が存するという結論を導き出したのである。

3.

さて宣長によれば、物語における善悪と儒仏の書における善悪とは、決して同じものではなく、その基準が異なっている。儒仏が人情のままに行動することを悪として厳しく戒めるのに対して、物語は教戒の書ではないので、そのような善悪には関係なく、ただ人情にかなうか否かを問題にするとして、

人の哀れなることを見ては哀れと思ひ、人の喜ぶを聞きてはともに喜ぶ、これすなはち人情にかなふなり、物の哀れを知るなり。人情にかなはず、物の哀れを知らぬ人は、人の悲しみを見ても何とも思はず、人の憂へを聞きても何とも思はぬものなり。かやうの人を悪ししとし、かの物の哀れを見知る人をよしとするなり。（八四頁）

と説く。「物の哀れを知る」のが「よき人」であり、「物の哀れを知らぬ」のは「悪しき人」だというのであるが、これは文学的価値基準に基づく物語における善悪と、道義的ないし宗教的価値基準に基づく儒仏における善悪とを、截然と区別した主張として重要な意味を持つ。以下、宣長によって「よき人」の典型とされた光源氏と藤壺、及び柏木を取り上げた部分を中心に見ていくことにする。

藤壺は桐壺帝の寵妃で源氏にとっては継母に当たる人でもあるが、物心つく前に母更衣と死別した源氏が、母の面影を求めて藤壺を慕ううち、いつしか恋に発展して、藤壺は不義の子（後の冷泉院）を出産、その皇子が後に冷泉帝として即位するという話である。まづ宣長は、この二人の仲らいについて次のように述べている。

別してはかの女院（藤壺）とのことなど、儒仏の教へ、尋常つねの了簡にていはば、無類の極悪、とかく論ずるにも及ばぬほどの事なり。しかるにその人をしもよき人のためしにいへることは、いかにぞや。よし悪しの指すところ変れるとはこのことなり。さりとしてその淫乱をよしといふにはあらず。物の哀れを知るをよしとして、その中には淫乱にもせよ何にもせよまじれらんは、棄ててかかはらぬことなり。物の哀れをいみじういはんとては、必ず淫事はその中に多くまじるべき理りなり。色欲はことに情の深くかかるゆゑなり。好色の事にあらざれば、いたりて深き物の哀れはあらはし示しがたきゆゑに、ことに好色の事は多く書けるなり。（九〇頁）

女院（藤壺）は不義あれども、そのことはすこしも悪しきとて貶へんしたることはなくて、薄雲の巻に云はく、
かしこき御身のほどと聞ゆる中にも、御心ばへなどの世のためにもあまねく哀れにおはしまして、豪家にことよせて、人の愁へとある事などもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人のつかうまつる事をも、世の苦しびとあるべき事をばとどめ給ふ云々、何と分くまじき山伏などまで惜しみ聞ゆ。をさめ奉るにも、世の中響きて、悲しと思はぬ人なし。

畏れ多い御身分の方の中でも、お気だてなどが、誰に対してもお慈悲深くていらっしゃいまして、権門を笠に着て人の迷惑となるようなことなども、自然交るものですが、いささかもそんなお振舞いがなく、人をお使いなさいますにも、世間の難儀になるようなことはお止めになりました。……何の弁えもない山伏などま

でがお悔み申し上げるのです。御葬送の折にも世間が挙って憂いに沈み、歎き悲しまない者はありません。

かくのごとくにほめ申したり。その中に、「世のためにもあまねく哀れにおはしまして」といへる、「哀れ」といふ詞に心をつくべし。下の品々はその哀れにおはします中の事なり。源氏の君に逢ひ給へることも、物の哀れにしのみぬ御心のありしゆゑなれば、いひまはせば「哀れにおはします」といふ中にもこもるべきなり。薄雲の女院をよき人とせること、かくのごとし。
(九三～九四頁)

この二人は、「儒仏」のみならず、世の「尋常の了簡」からも、最も強く戒められる罪を犯した「極悪」人と言うべきところだけでも、作者はそのような不義・淫乱には一向に関知せず、どちらも人情にかなった「よき人」として、「物の哀れを知る」者ゆえのあやくな恋物語に作りあげていく。

次に、源氏の正室女三の宮に通じて不義の子（後の薫大将）を生ませた柏木の場合は、どうなのか。これも尋常の議論で言えば、その不義の罪は重大で、他にいかほどよいことがあったにしても、とうてい褒めるに値しないことであるが、「それ（不義の恋の苦悩）ゆゑに死したる心をあはれみ、世の人に惜しまれ、源氏の君さへ深く惜しみあはれみ給ふ」（九三頁）というのは、「物の哀れ」を優先させて、「淫事」は棄てて関わらぬからである。また柏木の死を哀れむ源氏は、「大なるしれ者」と言われかねないところだが、己の恨み・怒りをさし置いて「物の哀れ」を優先させたのであって、作者が源氏をも柏木をも「よき人」としていることは明らかと言わねばならない。

さらに宣長は、作者がこのような不義、わけても源氏と藤壺による「物のまぎれ」を描いた意図を按じて、その一つは「好色の物の哀れのいたりて深きところを書き出ださんがため」（一八三頁）、もう一つは「源氏の君の栄華をきはめていはんため」（同）であるとして、再び源氏と藤壺の恋を取り上げ、次のように述べている。

まづ源氏の君はもとより万人よろづにすぐれたる人にて、物の哀れをよく知る人なり。さて薄雲の女院もまた万にすぐれたる人にて、前にもいへるごとく女の中にはたぐひなきよき人なれば、源氏の心をかけ給ふところに、忍びがたき物の哀れのありしゆゑに、このこと（密通）は出で来つらん。また源氏の君の心にも、この君をばすぐれて難なき人と思ひて心になひたるゆゑに、たがひに物の哀れの忍びがたきところありつらんゆゑに、源氏の君、一生涯この君のことをば忘れ給はず、何事につけても思ひ出でて、その、人にすぐれたることを恋ひしのび給へり。卷々にその詞見えたり。これ恋の中にもよき人のわが心になふは、ことに思ひの深くかかれるなり。

さてまたこの密通は、いたりて逢ひがたく、いたりて人のゆるさぬことの、いたりてわりなき仲なれば、ことに深く思し入れて一生涯忘れ給はず。これまた卷々にその心見えたり。これ逢ひがたく人のゆるさぬわりなき仲は、ことに深く思ひ入りて哀れの深かりしなり。かくのごとくこの御事は、物の哀れの深かるべき限りを取り集めて書けるものなり。これすなはちかの螢の巻にいへる、「よきさまにいはむとては、よきことの限りを選び出で」といへるものなり。「よき」とは物の哀れを知ることなり。（一八四～一八五頁）

「物の哀れ」をよく知る「よき人」同士の秘められた恋、「いたりて逢ひがたく、いたりて人のゆるさぬことの、いたりてわりなき仲」の二人は、互いに恐るべき罪深い不義と知りながらも、禁じがたい情念に動かされつつ、深い共感をもち合うほかはない。そのような人の「物の哀れの深かるべき限り」を取り集めて書いたもので、これこそは「螢」の巻の物語論に、「よきさまにいはむとては、よきことの限りを選び出で」とあった、まさにそのとおりの物語ということができるであろう。

『源氏物語』が男女の不義を描いたもう一つの意図を、「源氏の君の栄華をきはめていはんため」としたのは、これもまた「よきさ

まにいふとては、よきことの限りを選り出で」というのと同じで、自分の父が桐壺院ではなく実は光源氏であることを知った冷泉帝が、彼に「准太上天皇」（譲位した天皇を太上天皇という）の尊称を与えることにした。藤壺との「もののまぎれ」は、「恋の物の哀れ」の極致を現出させるとともに、歴史上にも先例のない臣下たる者を「准太上天皇」にして尊貴栄華をも極めさせた、と宣長は考えたのであるが、これについては実はもう一つの理由があったように思われる。

『七論』に冷泉院の物のまぎれを一部の大事とし、

この諷諭に心つかせ給ひて、いかにもいかにも物のまぎれをあらかじめ防がせ給ふべし、ようせずは疑はしき事もあるべしと、君の御心得に書けるなり。また臣下は薰大将のまぎれを見て用意あるべし。

といひて、作者の本意、皇胤のまぎれを恐れて書けるゆゑに、一部の大事なりとせり。今按ずるに、これまた唐土^{もろこし}の書の趣きをもて見るゆゑに、かくのごとく一部をことごとく諷諭の心に見るよりして、この事は皇胤のまぎれなりと心つきて、一部の大事と思へるなり。（一七九～一八〇）

これは安藤為章（一六五九～一七一六）がその著『紫家七論』の中で主張した「一部大事」説を引用して、宣長が反論を始めた箇所である。『源氏物語』は藤壺との密通によって生まれた臣下の子が天皇として即位したために、古来万世一系を堅持して来た日本の帝系に紛れを生じさせているが、何ゆえに紫式部がこんな物語を書いたのか。為章はここに、将来このような「物のまぎれ」が起きるかもしれぬことを慮り、作者が前もって警告した「諷諭」を読み取った。これに対して宣長は、女御・更衣に臣下に通じた話は『後撰集』『伊勢物語』『栄華物語』にあるが、それによって帝系が乱れたことはない。式部はこれらの昔話に准拠して藤壺のことを書き、「さてその上を一段珍しく書かむため」に「物のまぎれ」を書き加えたのであって、帝系のまぎれを書いたことは怪しむに足りぬし、また

「大事」とするには及ばないとした。

さて、『紫文要領』最後の項目「歌人この物語を見る心ばへの事」の末尾に、こんな文章がある¹³。

しかるに諸抄の趣き、この物語をもて戒めの本意として、見る人をしてその身の戒めとせしむ。これ、この物語の魔なり。かりそめにも戒めの心をもて見ることなかれ。丸この魔のために学者の惑はされて悟ることを得ざることを悲しぶゆゑに、今かくくはしくこれを弁じて作者の本意をあらはし、学者の惑ひを解かしむるなり。

そもそも戒めの方に引き入るるを、この物語の魔なりといふいはれはいかにといふに、戒めの心をもて見る時は、物語の妨げとなるゆゑにしかいふなり。何とて妨げとはなるぞといふに、戒めの方に見るときは物の哀れをさますゆゑなり。物の哀れをさますは、この物語の魔にあらずや。また歌道の魔にあらずや。（二三八～二三九頁）

物語を儒仏の教えや世の道義から切り離し、それらとの安易な習合を排して、文学の自律性を説く宣長の「もののあはれ」論の立場は、生涯にわたって変わることはなかった。四辻善成（一三二六～一四〇二）の『河海抄』から中世の古注を経て『紫家七論』に至るまで、権威ある諸抄が繰り返し説き続けて来た「戒め」の言葉を、「物の哀れ」を醒ます「魔」と呼び捨てた宣長の、揺らぐことのない信念と自信のほどが、読む者の心奥に響いてくる一文として忘れがたい。

このような宣長の「もののあはれ」論が、思想的にも、またその方法においても、契沖の学問を継承し発展させたものであることは、今日もはや周知の事実のようになっている。『源註拾遺』巻頭の「大

¹³ 次に引く「魔」について述べた一文は、『紫文要領』を改稿して成った『玉の小櫛』一の巻・二の巻には見受けられない。

意」の中に見える、

源氏の薄雲（藤壺）にことありしは、父子に付ていはゞ何の道ぞ。君臣に付ていゝば何の道ぞ。（中略）春秋の褒貶は善人の善行、悪人の悪行を面々にしるして、これはよし、かれはあしと見せたればこそ勸善懲悪あきらかなれ。此物語は一人の上に美悪まじはれる事をするせり。何ぞこれを春秋等に比せん。

（岩波書店版『契沖全集』第九巻）

といった契沖の『源氏物語』観は、人間性のあるがままの表現を尊び、勸善懲悪的な文学理解を排斥した点において、『紫文要領』に示された宣長の「もののあはれ」論の精神とその性格を同じうするものと見てよい。しかしながら、契沖の主張は未だ断片的な言辞に過ぎず、およそ学説として体系化されたものではない。訓詁注釈において多くの用例を博搜し帰納的に結論を導き出していく契沖の方法に学びつつも、宣長はこれを、古典の内なる精神を統一的に把握するための方法として、大きく前進させたばかりでなく、文献学的に基礎づけられた「もののあはれ」の理念によって、儒仏の書とは異なる「文学としての源氏物語」の独自の価値と存立の根拠を明らかにすることに見事に成功したのであった。

それにしても、この「もののあはれ」論に、『源氏物語』そのものの本質論としては、やや迫力に欠ける感があるのも否めない事実である。『紫文要領』巻下の最後に「歌人この物語を見る心ばへの事」という一項を設けて、

問ひて云はく、この物語と歌道と、その本意まつたく同じきいはれはいかに。

答へて云はく、歌は物の哀れを知るより出で来、また物の哀れは歌を見るより知ることあり。この物語は物の哀れを知るより書き出でて、また物の哀れはこの物語を見て知ること多かるべし。されば歌と物語とその趣き一つなり。（二一五頁）

と述べていることから知られるように、宣長の説く「もののあはれ」論は、『源氏物語』のみならず、「物語」及び「歌」にも等し

く通用する学説だったのである。阿部秋生氏の言葉を借りるならば、「歌の本意」はとりもなおさず「物語の本意」であり、それはまた「源氏物語の本意」でもあるという「三段跳びのような論理」が罷り通っている¹⁴と言われる所以であるが、これは契沖もそうであったように、中世以来の歌道における『源氏物語』観の伝統から、必ずしも自由でなかった宣長の一面を覗かせたものと言えるのではなからうか。寛政十年（一七九八）に成った『宇比山踏』（全集一）の中で、宣長は「物まなびのすぢ」すなわちその学問分野を、神学・有職の学・記録の学・歌学の四科に分けているが、歌学について「それにも、歌をのみよむと、ふるき歌集・物語書などを解キ明らむるとの二タやうあり」としているのも同断である。

『紫文要領』において宣長が明らかにしたのは、『源氏物語』の「物語」としての本意（一般的性質）であって、『源氏物語』そのものの個性的な創造性の本質には迫り切れていない憾みがあるようにも思われるのは、歌学の範疇においてこの物語を捉えていたことと決して無縁ではないであろう。後年、萩原廣道（一八一五～一八六三）が、宣長の「もののあはれ」論の価値を高く評価し、安藤為章の『紫家七論』の儒意を非としつつも、結局のところ後者の諷諭説に加担せざるを得なかったのは、『源氏物語』の主題論としての「もののあはれ」説の限界に気づいたからであるに違いない¹⁵。『源氏物語評釋』首卷（嘉永七年序）の「一部大事といふ事」の条において、広道は「もののまぎれ」をめぐる為章説と、これに反駁を加えた宣長の「もののあわれ」論の双方を丁寧で紹介した後、

¹⁴ 阿部秋生『源氏物語の物語論—作り話と史実—』（一九八五年、岩波書店）二〇五頁。

¹⁵ 工藤進思郎「国学者の源氏物語観—「もののまぎれ」をめぐる—」（『日本文芸の潮流』所収、一九九三年、おうふう）参照。なお以下、『源氏物語評釋』（嘉永七年序）の引用は鹿鳴草舎蔵板本に依った。

さて此二つの論のうちに、おのれはまづは安藤氏のいへるかたやよろしからんとぞおぼゆる。さるはかの七論のかきざまは、小櫛にいはれたるごとく全く儒者意にして、漢籍の例をのみもて論じたる物にはあれど、作りぬしのしたの心は、いさゝか諷諭めきたる事もありしにか、とおぼゆるよしもあればなり。

と述べて、皇妃との密通によって生まれた不義の皇子が即位するというような話は、『源氏物語』以前の物語には絶えて見られないのに、それをあえてここに書いたのは、作者に諷諭めいた心があったからではないかと、その論拠を物語の構造分析を通して探っていく。そして柏木と源氏の正室女三の宮の密通事件は、まさしくその「報応」を示しており、また「桐壺」巻末における「光る君」「かゞやく日の宮」（藤壺）の併称は、その最初の「伏案」と読めるので、光源氏と藤壺の「もののまぎれ」こそ「物がたりの中のむねとある事」であって、「其餘の事どもは、皆これをまぎらはさんために、あやなしたる物」と見た。これは「もののまぎれ」を「諷諭」と見なすことによって、初めて『源氏物語』の複雑な長編構造の中における主題性の展開が読めてくるとともに、「もののあはれ」の一元論では捉えきれない問題が他にも存在することを示唆する提言と言えるであろう。

〔付記〕本稿は、二〇〇八年三月二十一日から同二十三日まで、天主教輔仁大学で行った集中講義の初日、本居宣長の「もののあはれ」論について話した内容を論文形式にまとめたものである。当日の講義資料では「物語論」の部分は『玉の小櫛』、そのほかの部分は『紫文要領』を用いたが、今回の引用はすべて『紫文要領』に依ったこととお断りしておく。（岡山大学名誉教授）